


消滅都市

Everything in its right place

しも だしょうた かぶしきがいしゃ
下田翔大 (株式会社WFS) / 原作

たかはし けい
高橋慶 / 著

ゆうれい
裕龍ながれ / イラスト



▶ユキ

おんまえ お しょうめつ ま こ
3年前に起きた「消滅」に巻き込まれながら、
ただひとり生き残った少女。消滅の日には
い のこ しょうじょ しょうめつ ひ
ぐれた弟のソウマや、父親を探している。
おとうと ちちおや さが
ちちおや とど もと
父親から届いたメッセージを元にタクヤと
しょうめつ とし しょうめつ へ
ともに「消滅都市(ロスト)」に向かうが……。
しょうめつ ま こ ひ さがい しょうめつ ひと
消滅に巻き込まれた日を境に、消滅した人
たちのタマシイが見えるようになる。

▶タクヤ

はこ や しごと おとこ
「運び屋」を仕事にしている男。
けいやく まも
「契約はかならず守る」という
しんじょう
のを信条とし、どんなものでも
はこ とど
スクーターで運び届ける。



▶ **ギーク**

タクヤの親友。いわゆる「オタク」で、タクヤ以外の友達がいない。インターネットに強く、ネットの力を使ってタクヤの仕事をサポートしている。

▶ **ユミコ**

かつてのタクヤの同僚で、元恋人。何かとタクヤたちを手助けしてくれる。



▶ **エイジ**

ユキの父親の後輩に当たる人物。タマシイについて研究している。

▶ **ヘッドハンター**

お金さえ払えば、欲しい情報をそろえてくれる謎に満ちたビジネスマン。



▶ ホウカ

ある組織の研究施設で研究者として仕事をしていて、成果をあげられず悩んでいたある日、研究所長であるタイヨウから「ホシの世話係」を命じられる。真面目で優しい性格の持ち主。



▶ ホシ

生まれたときから、ある組織の研究施設で暮らしている。世話係のホウカから時々「母親からの手紙」を手渡されることはあるが、親には会ったことがない。組織から投与された薬の影響で、体が成長しなくなってしまうため、3、4歳くらいの体つきだが、実際には10年以上生きている。



▶ アキラ

ユキとソウマの護衛をするために、ユキの父親に雇われた専属SP。研究で忙しい父親に代わり、幼い頃からユキとソウマの面倒を見ていたが、消滅に巻き込まれ「タマシイ」となってしまう。

▶ タマシイ

消滅に巻き込まれ、消えてしまった人々は「タマシイ」となって姿を現すことがある。

▶ 消滅 (ロスト)

3年前に「都市がひとつ」まるごと消えてしまった事件。あるいは、「消えた都市の場所」のことを指す。

消滅都市

Everything in its right place

— 目次 —

プロローグ / 007

[第一章] ユキ-I / 019

[第二章] ホシ-I / 085

[第三章] ユキ-II / 125

[第四章] ホシ-II / 143

[第五章] ユキ-III / 165

エピローグ / 227



消滅都市

Everything in its right place

プロローグ



1

ホウカは、自分の研究者としての人生は、もうほとんど終わっているかわかっていた。いつも持ち歩き、ひまさえあれば開く本も、本当に好きなのか、楽しいのか、その中にげんごうとしているだけなのか、もうわからないくらいなのだ。

なにひとつ、成し遂げていない。ホウカは学者になりたかったが、学者になって何をしたいのかは実のところ、よくわかっていなかったのかもしれない。

分厚いレンズのメガネをかけ直し、冷たい廊下に立って深呼吸をする。緊張のせい、足首より下がすっかり冷えている。

「失礼します」

緊張のためこわばり、ふさいだ喉から、なんとか声を絞り出す。

「どうぞ」

中から答えた声は、大きく冷たかった。

研究員として働いているこの施設で、ホウカは自分の居場所を失っていた。自分がここで働く



目的や意味を、すっかり見失っていた。

ホウカは同年代の子どもたちより早く、良い成績で大学を出た。そして、この組織の情報収集能力や並行世界についての研究にひかれて入所したが、いざ中に入ってみると、自分より志の

高い、頭のいい人間がたくさんいて、息つくひまもなかった。

引つ込み思案なホウカがゆつくりと職場に慣れていくのを、誰も待つてはくれなかった。外の世界では優秀だったはずのホウカが、ここではただの根暗でしかなかった。

ドアを開けて入ってきたホウカを見るなり、タイヨウは苦笑した。

天井も床も壁も、真っ白な鏡面仕上げの落ち着かない部屋。タイヨウはやけにクラシックで重厚な木製の机の前の、大きな黒い革張りのデスクチェアに腰かけていた。

「私の姿を見て、生きているものはいないといううわさがあるだろう。あれは事実だ」

組織の研究を取り仕切る立場であるタイヨウは、長めの銀髪に白いワイシャツ、白いパンツに白い靴を合わせ、白衣をジャケットのように羽織っている。

「えっ」

ホウカはうわさのことを知らなかった。なにしろ施設内に仲のいい人間などいないから、うわさが広がっていても耳にする機会がなかったのだ。

「当たり前だろう。私のところへ呼ばれたら、役に立たない、クビになる研究員ということだ。そうなれば、当然、施設内では姿を見なくなる」

タイヨウは言いながら、ホウカの頭のとっぺんから足先までをじろじろと見定めた。

「はい……」

ホウカは自分もクビになるのだと思い、うなだれた。

「彼らには、研究の役に立たなかつた罰として、世界で一番、複雑怪奇で崇高な私の実験の助けになつてもらうんだ」

「え？」

ホウカは突つ立つたまま、メガネのレンズごしにタイヨウを見返した。

「髪の毛一本、皮膚の切れ端、血の一滴まで、私はクビになつたものたちの情熱を無駄にしない」
タイヨウはにこりと笑つた。

ホウカはタイヨウが本気なのか冗談なのかわからないまま、背筋を凍りつかせ、息をのんだ。

「その点、きみは宇宙一、運の悪い役立たずだ」

ホウカは混乱した、自分はクビなのか、そうではないのか。目の前のタイヨウの実験に使われ
てしまうのか、生き延びられるのか。

「どういう意味ですか？」

「きみには子どもの面倒を見てもらう」

タイヨウはきつぱりと言つた。

「子ども？」

「特殊な境遇の子どもでね。私たちがその子どもの面倒を見るのは、彼が研究対象となり得るからだ。つまり、きみは大事な実験材料、研究対象の監視役であり、世話係というわけだ」

「はあ」

簡潔な説明であつたにもかかわらず、ホウカにはいまいち、状況が飲み込めないでいた。しかし、とにかくクピではないのだ。

「彼は知能指数が非常に高い。だから、まだほんの赤ん坊だが、くれぐれもよちよち歩きのうちからバカにされないように」

「……気をつけます」

「それから、その子どもを健やかに保つ以上のことはするな」

「健やかに保つ、以上のことですか……？」

「必要以上の知識や教養を与えるな。文化的なものも最低限にとどめろ」

「なぜですか？」

ホウカは棒立ちで、黒いデスクチェアにもたれたタイヨウと向かい合つた。

「単純なことだ。彼は頭がいい。そういう生まれなんだ。天才の家系、新たな世界を創造する血

筋。わかるか？ 彼が成長する過程で知恵をつけたら何を考えるかわからない。彼をじゃまな存在にはしたくない」

「……わかりました。全力を尽くしてお世話します」

タイヨウはまた、じろりとホウカを見た。

「しかし」

タイヨウは人差し指をかざした。それまでは気づかなかったけれど、彼は真っ白な手袋をはめていた。つまり、外に肌が出ているのは、頭部と首だけなのだった。

「きみが子どもの世話を満足にできないようなら、やはりクビだ」

「はい」

「行きたまえ」

「はい。失礼します」

やはりもう二度と、研究にはもどれそうもない。ホウカはそう思いながら、その小さな部屋を出た。

ホウカは明日から、施設の奥に造られた小部屋で、赤ん坊の世話を始めることになった。子どもがどこの誰なのか知らないまま、命がけで、やらなければならぬ。

「あら、あなた……あなたが、子どもの世話を？」

そそくさと立ち去ろうとしたホウカを呼び止めたのは、あまり多くはない女性の研究者、ツキだった。

「はい……」

美しい小さな顔に緑色のフレームのメガネをかけ、真っ直ぐな長い髪を下ろして、知的なまなざしでこちらを見るツキは、施設内でも有名なだった。めったにその姿を見かけることがないタイヨウとはちがい、研究員とともに働き、みなを率いている実力者だ。

力強い態度を象徴するかのような、パリッとした白いシャツとパンツ。

「そう。あなたが」

ツキはタイヨウと同じように、頭のとっぺんからつま先まで、ホウカをじろじろと見た。



「子どもが好きなの？」

「いえ、普通だと思ひます」

「気の毒ね。でも、がんばって」

「はい？」

ホウカは彼女が本当にツキだろうかと、眉間にしわを寄せ、目を合わせた。

「がんばってと言つたの」

ツキはホウカの視線になど動じずに、もう一度、きつぱりと言つた。

「子どもの名前はホシよ」

「ホシ……」

思わぬ励ましに呆然としてゐるホウカを残し、ツキは「失礼」とひとこと、タイヨウのいる部屋やのドアを、遠慮なく開けて中に入つていった。



2

ツキが部屋に入ると、タイヨウは壁の中に組み込まれたスクリーンに最新の実験結果を表示して、それをながめていた。

「ツキ、子どもの世話係には会ったかい？」

タイヨウはツキのほうを見ずに尋ねた。

「ええ。大人しそうだった。律儀そうだし、言うことを聞きそうだわ」

ツキはタイヨウの大きな机に近づいた。

「ねえ、またそんな大きな画面にデータを……」

「これを見て内容を理解できる人間がどれだけいると思う。それに、どうせすべて失敗の結果だ」

タイヨウはそう言うのと、白いパンツに包まれた脚を組み、伸びをした。

「しかし、これからは彼がいる。私たちの実験の救世主になれる、彼が」

「あなた、ホシの名前を覚えてないのね。子守りに教えておいたわよ」

ツキは白くつるんとした部屋を見渡し、自分の腰かける椅子すらないことを確認するため息

をついた。

ツキは最近、タイヨウに出会ったばかりのころの自分をよく思い出す。

そのころ、ツキはタイヨウの弟子に近い存在だった。タイヨウは今と変わらずどうかしていたけれど、そのぶん、やることなすことのすべてが輝いており、どんな話も何よりためになった。心からおもしろいと思える人物で、どんなに悪趣味で残酷で頭がおかしくても、尊敬していた。

それが、いつから冷めてしまったのだろうか。ツキ自身が成長したために、タイヨウが特別に思えなくなったのだろうか。それとも、本当にタイヨウが興味深い人物じゃなくなったのだろうか。

はつきりとした答えが出ないまま、ツキは自らの知的欲求に従って、あるときはタイヨウの下で、あるときはまったく別の場所で研究を進めてきた。これからも、明確な答えなど、出す必要はないのかもしれない。

「あの子どもに試したい実験プランは、もう頭の中に組んである」

タイヨウは手元の小さなリモコンでスクリーンに表示されていた実験結果を消した。黒い画面に、タイヨウの姿がぼんやりと浮かび上がる。

彼は、ひっそりと笑っていた。

「だから、『あの子ども』じゃなくて、ホシっていう名前なのよ」

ツキは黒い画面ごしにタイヨウと目を合わせた。相変わらず、どこを見ているのかよくわからない、爬虫類のような目をしている。

「なんと呼んでも同じだ。この世界はもうじき終わり、新しい世紀が幕を開ける。名前などあつたつて無駄になる」

ホシの名前はタイヨウのためにはあるのではない。ホシ自身のためにはあるのだ。

「いいのよ、無駄で」

タイヨウとツキは、互いの言っていることがさっぱりわからないまま、実験プランを話し合つた。ふたりを世界とつなぐのは、どうしたつて、研究だけなのだつた。



消滅都市

Everything in its right place

だい いっしょう
【第一章】

ユキ

I



大きな音も衝撃も感じなかった。むしろ、耳鳴りがしそうなほどの静けさに違和感を覚えて、私は目を開けたのだ。しかし、目を開けたはずなのに、周囲はテレビの液晶画面に映った砂嵐に
おおわれているようで何も見えなかった。

私は自分がねむっているのかしらと思った。直前までのことなどすっかり忘れて、これは夢の中なのだろうか。

次の瞬間、誰かの手に強く背中を押された。私を急かしているようだった。

背中に添えられたその手は、父のもののように大きく固く、熱くはなかったし、弟の手のように小さくやわらかく、ひんやりもしていなかった。体温さえもやわらかく、力強いが雑さのない、しなやかな力。

私は、幼いころに事故で亡くなった母のことを思い出していた。

次に見たのは、見覚えのある街並みだった。そこで、私は自分が呼吸を止めていたことに気づき、大きく息をしすぎて、わずかにせき込んだ。背後からの強い風。温かな手の感じはしつかり



と背に残っている。思わずふり返ると、そこには、何もなかった。

大きな丸い『無』のへりに、私は背を向けて立っていたのだ。

そこには私が父と弟と暮らしていた都市があったはずだった。家があり、道路があり、電柱

があり、ポストがあり、郵便局、銀行、コンビニエンスストア、スーパー、駅、電車、車、学校、公園、その他、生活に必要なものはたいてい、そろっていたはずだ。それがすべてなくなっている。簡単に言うならば大きな穴だ。しかし、そのへりはまるでよく切れる刃物で切ったみたいに直線的で、砂ぼこりも少ない。見下ろしても底が見えないし、見上げて空は周囲と同じように続いて見える。

私はあまりのことにただ目を見開き、その場に棒立ちになって、遠くからかすかに聞こえる波の音を聞いていた。都市があつたときは、この距離からでは建物がじやまをして海の音など聞こえなかつた。

いつたい何が起きたのだらうと思うまでも、時間がいった。

これが、三年前、私が目撃した都市の消滅。通称『ロスト』だ。

ロストから生還した私は、事件のあらましも詳細も知ることなく、呆然としているうちに黒い服を着た男たちに見つかり、連れて行かれた。

黒い車の中、後部座席の真ん中に座らされた私の両側をうめるように、同じ黒い服を着た男が

それぞれ座る。フードを目深にかぶった彼らの顔はなかなか見えなかったし、見ようとも思えなかった。

せつかく、母の大きく優しい手が背中を押して助けてくれたのに、私はきつと殺されるのだと、わけもなく考え、身を縮める。

男たちは私に、どこに行くとも、何をすることも言わなかった。二度ほど、誰かと通信機で言葉を交わしていたが、特に内容のあるものではなかった。

黒い車から降ろされた瞬間、風に乗って、しめった土と木々のおいがした。ふり返ると、あたりは森のように木が多くしげり、うす暗かった。正面には無機質な建物があつたが、私がじつくりと観察する前に、黒い服の男たちに四方を囲まれ、両腕をつかまれるようにして、私はその中へ入っていくことになった。抵抗したにちがいないけれど、あまり覚えていない。

気づくと、せまい、窓のない部屋にひとりだった。

ドアについたただ一つの小さな窓には頑丈そうな鉄格子がはまっついて、こちらからはうまく廊下をのぞくことができなかった。

シングルサイズにも満たないベッドと、水差しの置かれたサイドテーブル。簡易シャワーとトイレ。これからここで生活するらしいとわかると、私は消毒薬くさいベッドに腰かけて途方に暮れた。

父と弟がどうなったのか、誰も教えてはくれず、そのくせ、彼らは数多くのことを私に質問した。

「タマシイが何か知っているか」

「波動性物質というのを聞いたことがあるか」

「父親と最後に連絡を取ったのはいつか」

私はそのすべてに、口元しか動かさずに「わからない」と答えた。実際、いつもどおりの日常生活を送っている最中にロストに遭遇した私は、そのとき、特に印象に残るような行動はとっていなかった。父と弟と暮らす家のリビングにいたことしか、思い出せない。

それ以外にも、大きな病にかかったことがあるか、あるいは今現在、病気にかかっているか、よくねむれるか、身長、体重、血液の様子、血圧、視力、聴力、歯の健康状態など、成長途中の私は、日々、全身を細かく検査され、だんだんと冷たい医療器具の感触に慣れていった。

施設に誰も私を訪ねてこない。迎えにも、助けにもこないことで、私は父と弟のソウマが口

ストでどんな目にあつたのか、真実を知らずともわかるような気がした。いつか、ここを出ようとか、なんとしても生きぬこうという意志は、毎日、どんどんすり減っていく。そのため、私はいつでも食欲がなく、よくねむれず、ある日、もう一度ロストが起こって、今度こそ自分も消えてしまえたらと、そんなことばかり願っていた。

夜にねむれない代わりに、昼間のほとんどのあいだ、まるでねむっているときのように意識を閉じて過ごす。

毎日、それを繰り返すうちに、三年もたつてしまった。



深夜の施設は昼間よりもっと静かで、私のいる部屋は窓がないから、灯りを消すと本当に真っ暗だ。私の着ている服やベッドシートがわずかにこすれる音と、かすかに空調の音だけが聞こえる。

私はこのまま、目的もわからない研究の実験材料として生きていかなければならないのだろうか。もう一ミリさえも希望を持ってないと、いったい何をきつかけに判断すればいいだろう。私の中でその判断が下ったとき、私は絶望して、この部屋で舌をかむのだろうか。毎日、暗くなつてからベッドの中で考えることは同じだ。

「あんたがユキか？」

彼がひっそりと私の前に現れたのは、そんなある日だった。

とつぜんの声におどろいて身体を起こすと、見知らぬ男が部屋の中をのぞいていた。するどく光る目が、じつと私をとらえている。

「そうだけど」

私はおそるおそる答えた。その話し方が、施設内の職員とはちがうように思えた。

「よし」

男は答えるなり、あっさりと部屋の鍵を開けた。

「行くぞ」

「あなた誰？」

私はベッドから出て、後ずさった。

「俺はタクヤ、運び屋だ。あんたの父親の知り合いにたのまれて、あんたをここから運び出しにきた。助けにきたんだ」

「運び出す」という言葉に怪訝そうな顔をする私に、タクヤと名乗った男は「早く行くぞ。すぐ警備がかけつけてくる」と私の腕をつかみ、非常灯もついていない、真っ暗な廊下を走り出した。

「ユキ！」

そのとき、今まで聞いたこともない、かん高い声が、私の名前を呼んだ気がした。

「待って、誰かが私を呼んだような気がする

……！」

「時間がない。誰か知り合いがいるのか？」

タクヤは立ち止まらずに尋ねた。

「いいえ、いるはずない……」

気にはなつたけれど、確認する間もなく、私はタクヤに手を引かれ、夢中で走った。

「お父さんの知り合いにたのまれたって言った



わね……それって、誰なの？」

暗がりでもわかる真つ赤なジャンパーを着たタクヤは、すごい速さで階段をかけ下りていく。長い間、まともに運動をしていなかった私は、そのわずかな距離ですっかり息が上がっていた。

「会えばわかる」

タクヤは面倒くさそうに言った。

「待って、私、苦しいわ……」

腕も、足も、まるで昔とはちがう。細いのに重たくこわばって、まったく思うように動かない。

「遅い！」

タクヤはあせってふり向くと、私の身体をひよいと抱え上げた。

「ちよつと、やめて！ 下ろしてよ！」

私は足をばたつかせ、真つ赤な背中を叩いた。

「あの部屋にもどりたいのか」

タクヤは取り乱さず、立ち止まった。

私は彼に両脚を持たれ、背中側に頭と両腕をだらりと垂らした格好で、目の前の真つ赤な背中を見つめた。

「いやよ。あの部屋にはもどりたくない！」

「じゃあ任せておけ」

廊下の向こうから、バタバタと足音がこちらに向かつてくるのが聞こえる。

「追つてきたわ！」

私は体勢を立て直すと、顔を上げ、タクヤの肩に手をついた。伸びすぎた髪が指にからみつき、久しぶりにじやまだと感じた。

「もう外だ！」

タクヤはどこか軽々と言うと、施設の外へとつながる、鉄の大きな扉を開けた。

約三年前、黒い服の男たちに連れてこられたところから、真っ赤な服の男に抱えられて外に出た。かつて見た木々の夜露に濡れた青いにおい。ひんやりと冷たい空気がほおに触れる。

久しぶりに見た夜空は、大きすぎてめまいがした。

タクヤは私を抱えたまま、さびついた大きな施設の門を乗りこえ、当たり前のように停めてある黄色いスクーターの前で下ろすと、さっさとそれにまたがり、私を見た。

「乗ってくれ」

私は肺いっぱい澄んだ空気を吸い込んだ。

「行くぞ」

タクヤに引つ張られるように、その後ろに乗つかる。

私を呼ぶ声は、聞きまちがいだつたのだろうか。

やがて、施設中の灯りがつき、警報が鳴り始めた。

「さよなら」

私がつぶやくのとほぼ同時にタクヤがエンジンをふかし、走り始めた。

「しつかりつかまれよ」

よく見ると、タクヤはぐしやぐしやの茶色い髪をしていた。赤いジャンパーのフードがはためく。

ちらりと振り返ったタクヤは、日に焼けた肌に対して白目のまぶしすぎる大きな目をはつきりと開いて、遠慮なしに私を見た。よけいな言葉をかけず、同情的な表情もせず、ただ、今、私自身の後ろにくつついているかを確かめているのだ。

その背中はやけに熱く、ジャンパーのやわらかなコットンが、陽を浴びた香ばしいにおいと、かすかにガソリンのにおいをさせている。

私は、間近で見たことのない野生の鹿を想像していた。タクヤはまるで、ちつとも懐かない、

大きな角の生えた鹿がそばに寄ってきたみたいだ。

さつき、タクヤが会えばわかると言った父の知り合いとは誰だろう。これから、その人に会うのだろうか。不安を抱えたまま、私はなびく髪を片手でおさえ、タクヤにしがみついた。

私はこうして施設を出た。次にどこに連れていかれるのかはつきりとわからないまま、ただ、身を任せるしか方法がなかった。

タクヤのことは何も知らなかったけれど、この三年間接してきた無機物のような白衣の人々に比べたら、こわいところなんてひとつもなかった。



タマシイ研究所を設立し、父といっしょに並行世界について研究していたというその男、エイジさんは、私が赤ん坊だったころに会ったことがあると話し、私が無事だったことをとても喜んでくれた。しかし、やはり、ロスト発生後の父と弟の行方については、何も知らないようだっ

た。

「ただ、きみの父親からは、メールが一通、届いている。しかし、返信しようにも送信者の情報がいつさいないんだ」

エイジさんはパソコンの画面にそのメールの文面を表示すると、腰かけているデスクチェアをぎりりと鳴らして背もたれに寄りかかった。

エイジさんの横の丸椅子に座っていた私は、立ち上がり、画面をのぞき込んだ。

「じゃあ、俺はそろそろ……」

私やエイジさんから少し離れて、壁際に置いてある古いひとりがけのソファに座り込んでいたタクヤは、急にそう言うと、頭をかきながら立ち上がった。

「タクヤ、少し待ってくれ」

礼を言おうとふり返った私より先に、エイジさんが彼を呼び止めた。



「これからまた、改めて依頼しなきゃならないことが出てくるかもしれない。ユキの父親からのメール、きみも目を通してくれないか」

タクヤは肩をすくめ、私の横に立ってメールを見た。

『ロストで待っている。』

「これだけ？」

私はぼそりと言った。

「ロストってあの大穴のことか」

タクヤは眉間にしわを寄せ、大きく首をかしげた。

「そうだ。私はユキの父親の研究とロストは密接な関係があると考えている。並行世界について、君たちはどの程度理解している？」

タクヤは私をちらりと見た。私は無言で首をふつてみせる。

「ユキも俺もまったく理解してない」

エイジさんはふむ、とうなずくと、パソコンの画面に図を映し出した。

「並行世界とは、今、私たちが生きているこの時間とはちがう、別の未来のことだ。これまでの過去のすべて、今後の未来のすべてにいくつもの選択肢とその先の未来があるとすれば、それが

並行世界。それらは今の世界と同時に存在している別の時間軸にある世界のことだ」

エイジさんはロストでできた大穴と並行世界をつなぐ矢印を指さした。

「本来なら我々が生きている世界と並行世界は交わることはない。ところが、どういうわけか、三年前、ロストによってその扉が開いてしまった」

エイジさんはため息をついた。

「ロストはユキたちの暮らしていた都市の消滅という形で現れたが、あの大穴こそが並行世界への入り口なんだ」

都市の消滅。ロスト。並行世界。これらの言葉は施設で何度も聞いたものだった。しかし、あそこにはその意味を教えてくださいける人間は誰ひとりとしていなかった。

「ロストや並行世界がなんなのかはわかった。でも、それとユキとなんの関係がある？ それに、波動性物質については？」

タクヤは次から次へと質問した。

「並行世界の入り口、つまりロストから発生しているのが波動性物質だ。波動性物質はこれまでこの世に存在しなかった物質なんだ。ロストの生き残りであるユキは波動性物質を多く体に浴びた可能性が高い。組織はユキを調べて、その影響の強さや種類を調べ上げたかったのだろう」

「影響？」

タクヤが私の顔を見る。

私には身に覚えがあった。

三年前のロスト以来、私は消滅してしまった人たちのタマシイを呼び出せるようになった。それこそが波動性物質の影響なのかもしれない。きつと、組織も、エイジさんもそう考えているの
だろう。

「私がタマシイを呼び出せるようになったことと父の並行世界の研究は関係があったのね」

「なるほどな。どうりで不思議な力だ。波動性物質を浴びた人間、全員が、似たような力を使えるようになるのか？」

タクヤは難しい顔をして壁にもたれている。

「それは組織も知りたいところだったろうが、ユキのような特別な力を持ったものがほかにいるという話は聞かない。もちろん、今後はわからない。ユキにも、また別の影響が見られるかもしれない」

「メールのとおり、ロストへ行けば父に会えるかしら……」

「可能性はゼロではない」

しかし、ロストのあつた場所は今や本当に大きな穴が開いているだけの無の場所だ。同時に存在する別の世界とつながっているといても、それが真実かどうかはわからない。ロストそのものが少しずつ周囲に向かって広がっているという情報もある。

「メール自体が組織の罫かもしれないぜ」

タクヤは腕組みし、淡々と言った。

「でも、父やソウマのことが、もしも少しでもわかるとしたら……」

「私にできることはなんでも協力する」

エイジさんは、私がこうするとわかっていたから、タクヤをひきとめたのだろう。

私は立ち上がると、こつそりとあくびをしているタクヤの真ん前まで行った。

「あなたは運び屋なんでしょう？」

「ああ、そうだ」

「私をロストまで運んでくれない？」

「依頼するの？」

タクヤは少しだけ、おどろいた様子だった。それに、思っていたほど簡単には引き受けてくれなかった。でも、彼もこの件の真実に興味がわいたようで、報酬さえきちんと支払われるのなら

ばと、仕事を請け負ってくれた。



4

私は新たなその旅で、自らが得てしまった『タマシイを呼び出す力』について深く学ばなければならなかった。

消滅によって亡くなった人々のタマシイは、組織の何者かによってあやつられ、真実を探る私たちの行く手をじやましようとした。それに対抗する手段として、エイジさんは私に、タマシイを呼び出す力を有効に使うように言った。

私はスクーターの後ろに座ってタクヤの背後から、タマシイが私たちに向かってくるのを見ける。そうしたら、目を閉じて、念じる、または、想う。そして、感じ取る。次に目を開ければ、もう、彼らは私のもとにいる。

私が最初に呼び出したのは、かつて、父の警護をしていた若いSP、アキラのタマシイだった。



私は、アキラがロストに巻き込まれて死んだことを知らなかった。

「アキラ……」

おどろき、目を見開いた私を見て、アキラはうすく笑った。

向かってくるタマシイに応戦しながら、私はタマシイを呼び出すというのがどういふことか実感した。これから、ロストの真実を追う限り、私がこの能力を失わない限り、こういふことが続くのだ。

私たちはロストにたどり着くことができた。しかし、そこで体験したことは想像を絶していた。ツキやタイヨウとの激しい戦い、そして、父との再会。あの時、私がしたことが正しかったのか、今でもわからない。

結局、ロストは今も存在し続けている。私の胸に残った痛みと同じように。私ひとりだったら、ロストからもどることはなかったかもしれない。しかし、私にはタクヤがいた。

私の依頼どおり、責任を持って私を運び続け、危険な目にあっているタクヤをひとり残すわけにはいかなかった。だから、生き続けることを選べた。タクヤの背中では私を絶望からかくしてくれた。

「お前はやるべきことをしたただけだ」

陽が暮れて肌寒くなると、タクヤはノースリーブの白いワンピースをすんと着ただけの私に、赤いジャンパーを貸してくれた。それを着て、彼の背中にもたれるようにして、声を殺して泣くことが何度かあった。

「泣くなよ」

長い時間、同じものを見聞きして、いつしよに戦って、走るうちに、私はタクヤのことを深く信用するようになった。

口では仕事第一主義をつらぬいているけれど、それだけでは割りきれない働きをすることも多いタクヤは、ロストによつてすべてを失った私のただひとりの友人であり、謎を追うパートナーとなったのだ。

ロストの核となつていた父がいなくなった今、タクヤと私はエイジさんのもとへ、その事実を伝えるにもどり、身体を休める必要があつた。すべては、再び真実を探すため。また、新しい旅に出るために。

これは、ロストから脱出した私たちが次の旅に出るまでの物語だ。